

村人から感心された。「癩」になった妻が離縁されるだけでなく、夫が「癩」になったときは、妻が夫を棄てて実家に帰るのは致し方ないこととみなされていたことが伺える。また共同体の対応も、先の武平のように経済的援助を受けられる場合もあるが、この百姓のように棄てられてしまう場合もあった。

「癩者」を棄てることは一般的だったのだろうか。佐藤成祐（1762-1848年）の随筆『中陵漫録』は、本草家である佐藤が薬草採取のために全国の山野を旅した時の見聞記であるが、この中の「棄癩」という記事は、「岸穴」の中に「癩」患者が一人、棄てられて住んでいるのに巡り会ったことを記す。佐藤は「癩」患者を棄てる行為について「唐土にても此類あり」と、わざわざ中国医書を引いて説明する。佐藤が「棄癩」の記事を載せ、中国医書まで引用したのは、それがよくあることではなく、珍しいと感じたからだろう。「癩」患者に会った場所を「某国」とのみ記して国名を伏せているのは、幕府の仁政イデオロギーに反する「棄癩」という病人遺棄が、決して表沙汰にできることではなかったからと推測される。

## 5. 小括

以上のように近世の「癩」患者の生活形態は多様で、地域や各「家」の事情によっても異なってくる。奈良・京都では、中世「非人」の生活形態を継承し、勧進する下級宗教者「物吉」として存続した。物吉集団に所属するのは強制的ではなく、旅の途次で自らの意志で入ることも出来た。物吉と町方の人々の関係も、勧進や参拝を通じて交流があり、近代の強制隔離施設とは性格を異にする。

これに対して近世に入り新たに登場した形態が、「癩」を身分として把握して「穢多」身分の下役などの「役」を賦課し、かわりに「乞食札」を与えることであった。それは病によって労働力たりえなくなった「癩」患者に対する、近世国家が用意したひとつの受け皿としての側面も持った。が同時に、「癩」を賤民として身分編成することにより、新たに「癩」患者に対する身分的賤視と「役立たず」という蔑視を生んだ。

家を出て、温泉地や神社仏閣に向かつて旅をする「癩」患者もあった。病人の旅は生類憐れみ令以降、幕府による一定の保護を受けることができたし、また温泉地には無料で入浴できる「非人湯」も設けられていた。しかしながら病人送りのシステムは、必ずしも均一に機能していたわけではない。「乞食非人」と称されるほどみすぼらしい姿になった時には、介抱されることなく見殺しにされることもあった。

家族とともに暮らし、医者にかかる人々もいた。発病がそのまま離婚につながるとは限らない。だがこれもまた、身分や家格、地域による「家」の体面へのこだわりの差や、「家」や共同体の扶養能力いかんによって婚家を出されたり、妻に去られたり、時には村落外に遺棄されもした。

このように、近世の「癩」患者の生活形態を一括して論ずることは困難である。だが全体の大きな流れとしては、中世社会に見られた「癩者」の勧進が示すような宗教的救済と共生の論理に対して、17世紀後半以降、幕府の仁政イデオロギーに裏付けられた病人救済施策がシステムとして整備・運用されるようになっていったことが確認できる。それは制度として様々な不備があったもの